アメリカの図書館での出来事

北九州市立大学　国際環境工学部　櫻井和朗

米国マサチューセッツ州西部にアムハースト（Amherst）という山と畑に囲まれた小さな町がある。地名から新島譲、内村鑑三やクラーク博士の名前を連想する人がいるかもしれないが、確かにこの町には彼らに縁のあるアムハーストカレッジとマサチューセッツ大がある。大学をのぞけば、アムハーストはニューイングランド地方の典型的な田舎町である。１本しかないメインストリートに両側には、古い赤レンガの建物が街路樹にそってならび、高い塔をもった教会と芝生の広場が町の中心にある。アメリカと私生活を愛する人々が静かに生活している。町の随所には、メイフラワー号着岸以前から存在しているカナディアンメープルの大木がそびえ、秋になると鮮やかな朱色に染まる。道路や広場が大量の落ち葉で埋め尽くされた頃、“ trick or treat”と可愛い魔女が現れ、やがて、寒くて暗く、そして嫌になるほど長い冬が訪れる。

私は、９０年代の初めの３年間をマサチューセッツ大の高分子学科で研究生活を送った。１年目を過ぎた頃、英語にさほど困らなくなり、研究もようやく順調に進み始め、米国生活に慣れたと自身を持ち始めていた。時々、アメリカ人の様に振舞おうと無理をして、わざとスラングを使い、スポーツバーで異様に大きなピザを手つかみでむさぼり食いビールをラッパ飲みして、大学のバスケットチームを応援していた。今から思えば、自分の中で民族としての主体性の崩壊がわずかに進み始めていたのかもしれない。

そんな頃、文献を調べるために普段は用がない図書館本館を訪ねた。帰り際に偶然、日本コーナーを見つけた。アメリカ人の日本に対するイメージは、日中韓が混在し、しかも自分勝手な虚像を含んだものが多い。例えば、映画「パールハーバー」が描いた日本の海軍司令部には明確な悪意を感じるし、時代考証に注意しているはずの「ヒマラヤ杉に降る雪」も日本人家庭の演出は誇張がある。ハリウッドが作る映画ばかりでなく、ボストン美術館の日本庭園もかなりの違和感を日本人に与える。「アメリカ人には日本は分かるはずがない」との先入観を持っていた私は、アメリカ人の独善主義を笑ってやろうと、“ What the hell, let’s check out”、覚えたばかりのスラングをつぶやきながら、日本文学コーナーに足を踏み入れた。そこで、私はわが目を疑った。特徴のあるデザインの装丁が懐かしい夏目漱石全集をはじめ、日本の代表的な作家の著作が、天井まである棚を埋め尽くしていた。なんと、阿川弘之の「山本五十六」まで置いてある。通路の向こうで「EXIT」と輝いている非常口のサインと本棚の「Souseki Natume」と書かれた表示を除いたら、そこはまるで日本の図書館である。私は思わず「こころ」を棚から取り出しページを開いた。乾いた音がしてページが開き、懐かしい日本の本の香りが立ち昇って来た。次に、「暗夜行路」を読んでみた。千光寺の鐘がなり百貫島の燈台が光りだす故国の夕暮れの景色を読んだとき、不覚にも私は涙が出そうになった。志賀の簡素で格調の高い文体がこれほど強い感情を引き起こすとは予想できなかった。趣味の悪いアメリカかぶれに陥りかけていた私の精神を、一瞬にして元に戻してくれた様だ。それから、私はこの日本文学コーナーの数少ない利用者となり、自宅で眠りに付く前に借りた本を読むようになった。特に、退屈で長いアマーストの冬の夜には、日本の文学と美味しい地ビールは必需品となった。

現在、週末に自宅に帰る新幹線の中では、藤沢周平の描く江戸市井の人情や海坂藩の下級武士たちの物語を読むのを楽しみにしている。おそらく、藤沢周平全集もアマーストの図書館においてあるだろう。田舎の大学の図書館に、ほとんど読まれない日本の文学全集を置くなんて、アメリカは懐が恐ろしく広い国である。昨年の 9 月１１日以降、アメリカは少し変になっているが、最後にはアメリカの良識が勝つことを信じている。

WELCOME
University of
Massachusetts
Amherst
VISITORS CENTER
CAMPUS CENTER
PARKING GARAGE

SILVIO O. CONTE
NATIONAL CENTER FOR
POLYMER RESEARCH